

世界を舞台に活躍する研究センターの裏方として

As a Coordinator in Charge of Behind-the-Scenes Arrangements

上口 大介

Daisuke, KAMIGUCHI

要旨：

フレスコ壁画研究センタープロジェクト推進コーディネーターとして採用された著者が、1年間の活動を振り返り、プロジェクトの目的・目標をどのように達成し成果を上げることが出来るか苦悶する。

筆者が宮下孝晴教授と出会う経緯やコラボレーションの成果、「サンタ・クロチェ教会壁画修復プロジェクト」との関わり、センター設立に至る裏話を紹介する。

予算獲得までの長く険しい道程、要求のポイントを解説し、大学事務職員と社会貢献活動で得た42年間の経験を活かしてコーディネータの重大な責務を果たすことができるかを問う。

本年度から始動した南イタリア中世壁画群調査プロジェクトのイタリア側との契約で暗礁に乗り上げたこと、音楽が結ぶイタリア人との国際交流、壁画選定の予備調査の様子、危険がいっぱいの南イタリアの本格調査の準備など、研究者と事務の中間の立場で活躍する様子を語る。まとめとして本年度の活動成果の一端を紹介する。

キーワード：コーディネーター、プロジェクトの目的・目標、概算要求、南イタリア、サンタ・クロチェ教会

Summary：

I look back over a past year, and agonize about achieving a research objective as a project-coordinator of the Research Center of Mural Paintings.

I introduce how I met Professor Miyashita and collaborate with him, how I was involved in the restoration project of the mural paintings at the Santa Croce Basilica, and the back story how the Center was established. Next, I comment on the long struggle to acquire a budget and also comment on its know-how. To carry out my duty, I applied my 42-year accumulating knowledge and experience as an administrative officer in the University or my contribution to society. Then I talk about the project on the study and the research of the medieval mural paintings in south Italy, which just kicked off this annual term, deadlocked over its contract, about enhancement in the mutual understanding through the music, how about preliminary studies and arrangements in south Italy to define the areas and the paintings for the Project, which has risks attached, and how I work behind the lines to bridge the differences between studies and clerical processing.

At last, I wind up my report by presenting a part of the annual achievements.

Keywords: coordinator, project objective, acquire a budget, south Italy, the Santa Croce Basilica

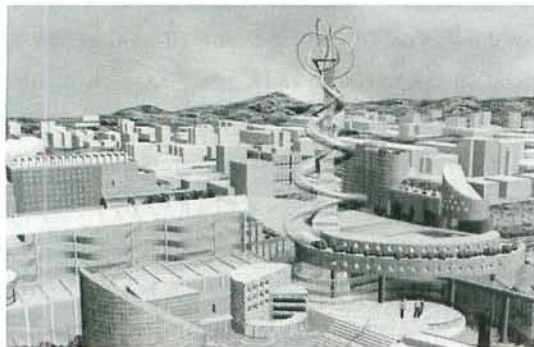
I. はじめに

私と宮下孝晴教授との出会いは、私が金沢大学創立50周年記念事業を担当していたことから始まった。1998年7月に岡田晃学長の下「キャンパス2050検討グループ会議」が設立され、50年後の大学の在り方の夢を描いたCGアニメーションを制作するその座長に宮下孝晴教授が指名され、私がその事務担当となったことが初めての出会うきっかけとなった。この会議は、学長直轄の組織で法人化前の大学にあっては前例のない若手の教官と事務官が検討

メンバーとして参画し、対等の立場で検討する目的で設置された。国立大学は当時、文部省の護送船団として、予算要求は、国立大学間で情報収集し、先行大学の例を参考に要求書を作成していたため、私立大学の取り組み例を参考にする発想はない時代であったが、本組織では、積極的に先進的な私立大学を視察し、未来の金沢大学の在り方を検討することにした。その事業の一環で1998年10月「キャンパス2050」シンポジウム開催、1999年5月金沢大学

創立 50 周年記念事業式典担当 (宮下孝晴教授企画・監修)
CG アニメーション 50 年後の未来像制作、大学紹介ビデオ制作、記念モニュメント設置、創立 50 周年記念展示等
参画、2000 年 5 月金沢大学フォーラム「地域と金沢大学」
公開シンポジウムでの宮下孝晴教授講演、2000 年 10 月
「大学紹介ビデオ・CD-ROM」を日本語と英語版で制作、
その CD-ROM を宮下教授からの提案で、大学の学生募集
のための広報資料として配布することになり、私が東京都
内大手の進学塾へ広報 (営業) 活動のため訪問した際、担
当者から「国立大学が学生募集のための CG アニメーション
を作り、営業にきたのは初めてですね。」と驚かれた。
このように宮下教授とのコラボレーションは数々あり、多
くのマスコミにも取り上げられた。

そのころから宮下教授は、大学の広報はどうあるべきか
を真剣に考へられ、斬新なアイデアでデザインした作品
の制作現場に私も何度か徹夜で立ち合ったことを思い出
す。そんな先生の熱い情熱に動かされ、先生の期待に最大
限応えることが、事務担当としての私の使命ではないかと
考えていた。



キャンパス 2050 検討グループ (座長 宮下教授)
「50 年後の金沢大学」CG アニメーション

II. サンタ・クローチェ教会壁画修復プロジェクト」との 関わり

2000 年当時、企画広報室企画係長であった私に、宮下
孝晴教授から、東京の篤志家から 2 億円の寄付申し出があ
り、その取扱いについて相談を受けたことがきっかけで私
と本事業との関わりが始まりました。前例のないことだけ
に、2 億円を基に財団化して事業を進めるか、大学として
受け入れて実施するか、私一人では判断できず松坂浩総務
課長 (現、三重県教育委員会事務局学校教育分野総括室長)
に相談して、宮下教授とともに当時の林勇二郎学長に直に
相談することになった。学長から、大学の国際貢献プロジェ
クトとして是非進めて欲しいとの力強い応援を得て、事務
局総務部、財務部、施設部、教育学部関係者による対応検
討チームが直ぐに編成されたが、十数回にわたる検討を得
て、数年後、ようやく文部科学省や文化庁等にお伺いを立
て、方針が決定した。特に、世界遺産の修復ということも

あり、UNESCO 本部 (パリ) に勤務経験のある田中健太郎
国際課長 (現文化庁伝統文化課文化財国際協力室室長補佐)
が中心となってイタリアとの契約までにこぎ着けることが
出来た。

2004 年社会貢献室 (現、地域連携推進センター) を担
当していた私は本格的に動き出した「サンタ・クローチェ
教会壁画修復プロジェクト」を金沢大学の国際貢献として
大きくクローズアップするため、社会貢献室発行の情報誌
「地域とともに」に掲載することにした。当時社会貢献室
長であつた橋本哲也副学長の理解を得て、2006 年に初め
てイタリアのフィレンツェに滞在中の宮下教授を訪ね、壁
画修復の進捗状況を現地で取材した。2008 年角間北地区
事務部学生課長として人間社会学域の担当となった私に宮
下教授からの要請があり、2 回目となるイタリアへの出張
の機会を得、本プロジェクトに係る事前打ち合わせを行っ
た。2009 年には、サンタ・クローチェ教会壁画修復プロジェ
クトの追加協定締結に立会うなど、その間 4 回にわたりイ
タリアのフレスコ壁画調査に帯同し、同プロジェクトに関
し間接的な支援を行ってきた。



2006.1 初めて訪れたフィレンツェで宮下夫妻と
中央が著者

III. 私と美術との出会い

私は、昔から美術に興味があつたわけではないが、過去
に 10 数回の海外旅行の機会があり、パリのルーブル、オ
ルセー、サンクト・ペテル・ブルクのエルミタージュ、ロ
ンドンのナショナルギャラリーなどの世界有数の美術館を
鑑賞する機会に恵まれた。

その中でも特に、感動したのは、初めて訪れたフィレン
ツェのウフィツィ美術館である。その理由は、美術の教科
書か図鑑でしか見たことのない有名絵画の前に立ち、西洋
美術史の宮下孝晴教授の解説で鑑賞したときから美術の世
界の魅力に引き込まれていった。

2006 年私が初めてイタリアのフィレンツェを訪れ、
600 年以上前の「サンタ・クローチェ教会大礼拝堂壁画「聖
十字架物語」の 26m の足場に上って壁画の前に立った時、
フレスコ壁画の魅力と奥深さに感動し、このプロジェクト
のために、宮下教授のために自分の出来ることはないか真

剣に考え始めていた。

それから 5 年後の今、人もうらやむようなイタリアをフィールドにした本プロジェクトに関わり、世界遺産のフィレンツェ、パドヴァ、サンジミニャーノ、シエナ、ピサ、ラヴェンナ、マテーラ、アレツツォのほか南イタリアのプーリア州バーリ、グラビーナ・イン・プーリア、ポッジャルドなど宮下教授の解説付で美術ファンからみたら最高に贅沢な調査に同行させてもらい、フレスコ壁画研究の学問領域の奥深さに驚いている。

IV. コーディネーターの責務と使命

私が、「フレスコ壁画研究センター」のコーディネーターとして採用された理由は、これまでの大学行政等の経験を生かし、研究代表者の宮下教授とともに教育改革・研究の活性化等に係る事業計画の策定に関わって来たことや、当時、人間社会学域の大学院人間社会環境研究科に「文化資源学コース」の新設、文理融合型の大学院等教育プログラムの開発、「国際文化資源学研究センター」の設立計画等の構想等、教育・研究に関する改革を期待されていたからにほかならない。

このような関わりから、宮下教授から 2010 年 3 月定年退職を迎える予定の私に、「人間社会学域の教育支援を担当していた学生課長の経験を活かし退職後は、この予算が通ったら本事業の目的、内容等を熟知している君が責任をもってこのプロジェクトと一緒に進めて欲しい」との強い要請があり、本年 5 月に設立された「フレスコ壁画研究センター」のコーディネーターとして、新たな人生を歩むことになったのである。

私のコーディネーターとしての使命は、特別経費（プロジェクト分）の概算要求書で計画した事業を年次計画通りに進め、これらの事業の進捗状況をコントロールし、予算を効率的に使用し、成果をいかに上げ社会に発信することができるかが私の役割と考えている。

1. 大学事務職員としての経験を活かせるか

偉大な国際貢献プロジェクトを推進するコーディネーターを引き受けに当たり、私のこれまでの長い事務職員としての経験が役立つか少々不安もあった。大学職員には、教員と事務職員の中間の立場で、教育・研究支援業務を遂行する力が必要であり、これらの能力を育成していくことがこれから必要な資質として求められている。私は、これらの力は、事務職員としての多様な経験だけではなく、経営感覚、情報収集力、分析力、実行力も備え、研究計画の立案、予算獲得にも関与し、教員の目指す教育・研究支援のためのパートナーとして獲得後のサポートも出来るよう努力することが大切だと思っている。特に管理職になってからは、

教育・研究支援を担当し、大学の教育改革・研究の活性化に寄与することが出来るような人材の育成と環境づくりが必要であると考え、意欲のある優秀な部下の育成を目標に取り組んできた。

私は、大学事務職員として 42 年間複数の業務領域（総務、病院、財務、施設、情報、学生の各部を経験、大学改革、評価、企画広報、経理・予算執行、社会連携、生涯学習、学生支援、総務課の初代研究協力係長など各分野で広い業務を担当してきた。また、約 40 年間、社会貢献活動をボランティアで継続できたことも大変幸せなことだと思っている。それらの経験を通して多角的な視点でものを見る力が少なからず得られたのではないかなと思う。特に、2001 年 10 月大学改革推進室室員（2002 年 7 月同室事務室長補佐）、2002 年 4 月法人化準備委員会担当、2002 年企画広報室時代に金沢市西町教育研修館に「金沢大学サテライト・プラザ」開設、全国国立大学企画広報担当課長室長等情報交換会開催、2002 年 5 月金沢大学・石川県・金沢市連絡協議会設立、「金沢大学地域貢献推進室（2004 年 4 月社会貢献室に改称）」の設置、2003 年国立 26 大学地域貢献ネットワーク設立（事務局）、地域貢献推進大学シンポジウム（東京開催）などに関わることで多くのものを学んだ。これらの業務を全うすることが出来たのも、素晴らしい先輩、同僚、部下に恵まれ、組織として一丸となって 1 つの目標に向かって努力した結果として、成果を上げることができたことを、心から感謝しなければいけないと思っている。



「第 18 回全国都市緑化いしかわフェア」
宮下教授監修の出店花壇を説明する筆者

2. 社会貢献活動で得た経験を活かせるか

私は、中学から合唱部に所属し、金沢大学に就職した 1968 年から県内で中心的な活動をする合唱団で活動始めた。その団に所属したことが社会貢献活動を始めるきっかけとなったのである。入団の数年後には、若干 24 歳で石本一雄金沢大学教授が理事長を務める石川県合唱連盟の事務局長を任せられ、その 2 年後には、石川県知事を会長とする石川県音楽文化協会の事務局長等（現在は専務理事）の重責を任されていた。それから、現在までボランティア

で社会貢献活動が続いている。その間、団体の運営、予算確保等、各種文化事業、国際交流の企画に携わり、異分野の人達との出会いや地方自治体等との連携、人材のネットワークづくりなどを通して、多くのものを学ぶことができた。

40 数年間、大学勤務と社会貢献活動の二足のわらじを履き、年中無休で働いてきた経験は、各種問題に関する基礎的な知識・理解、戦略的な企画能力やマネジメント能力など、実践を通して少なからず身に付け大学の業務だけでは得られない貴重な経験をすることが出来た。これらの経験は、大学の職務でも大いに役立った。2002 年 5 月本学初の地域貢献推進室（初代室長：現中村信一学長）の立ち上げに関わり、平成 14 年度文部科学省の「地域貢献特別支援事業」に全国の国立大学が申請した中、第 1 次の 5 大学の 1 つに選定され、7 千 4 百万円予算を獲得した。里山自然学校等を始めとする社会貢献事業の推進を図り、その後も社会貢献事業関連予算の要求、平成 17 年度概算要求（連携融合事業）を始め G P、競争的資金、外部資金の申請等を教員と連携して獲得することが出来た。

V. 予算（概算要求）の獲得は、熾烈な競争

1. 予算要求から内示までの長く険しい道程

私は、これまで宮下教授から、先生の教育研究に対する熱い思いと夢について何度も話を伺ううちに先生の国際貢献活動を広く社会に発信し、その成果を本学の教育・研究活動に生かすことが必要であると思い始めていた。そこで新たなプロジェクトを計画し、概算要求して予算を獲得することを提案した。それは 2008 年私が角間北地区事務部学生課長として人間社会学域の担当となり、事務室が宮下教授の研究室に近くなった時から始まった。これまでの「サンタ・クロチェ教会壁画修復プロジェクト」の成果を基に、より大きく大学の国際貢献事業として発展させるため、どのようなプランにするか、先生の思いをメモにまとめながら壮大な夢のプラン作りに入って行った。

プランは、研究国際部や担当理事に相談し、修正を加えながら作成した。特に、当時の財務部長、財務企画課長からの適切なアドバイスを受けることができた。2009 年 1 月行われた文部科学省でのヒアリングでの、宮下教授の説明は、当初の予定時間 30 分をはるかに超え、1 時間近くになったが、本省の担当官も熱心に聴いていただき、好感触が得られ、神の光が差し込んだ気がした。

概算要求して予算を獲得すると言っても、容易なことではない。熾烈な競争を勝ち抜かなければ獲得することはできないのだ。まず要求の流れを簡単に説明すると、①教員からの発案、②学類への説明③学域の推薦、④学内ヒアリング、⑤文部科学省への説明、⑥教育研究評議会で了承、⑦大

学としての順位付け⑧文部科学省へ提出、⑨財務省説明、⑩政府予算案了承、国会の予算成立を得て初めて予算が付くことになる。特に、2010 年度予算に関しては、政府の初の事業仕訳が始まった年で、例年であれば年末の予算内示で連絡があるのだが、この年は年明けの 1 月始めまで連絡がなく、半ばあきらめかけていた矢先に朗報が入ってきた。夢のような結果に、宮下教授と歓喜の声を上げながら、一方では大きく目標を掲げ過ぎた感のあるプランに、責任の重大さをひしひしと感じていた。

2. 特別教育研究経費申請のポイント

特別教育研究経費（概算要求）についての基本的な考えは次のとおりとなっている。

「国立大学法人における教育研究活動は、当該法人の目標・理念や経営戦略に沿った自主的・自律的な取組によって推進されるべきものであり、国は各法人の意志を踏まえ支援することを基本としている。」このような考え方のもと、新たな教育研究ニーズに対応し、各法人の個性に応じた意欲的な取組を重点的に支援するため、運営費交付金の仕組みの中に特別教育研究経費が設けられた。

大学が特別教育研究経費を獲得するためには、大学の個性・特色の明確化が必要である。本学の大学憲章である「教育重視の研究大学」を実現するため、当該研究に予算が必要であることを明確に説明できるかが課題となる。

平成 22 年度概算要求書の作成に当たっては、次の事項をいかにわかりやすく簡潔に説明するかがポイントである。

1) 事業の必要性を事業における目的・目標、社会的ニーズ（産業界、学生、地域等）、当該学問分野の動向等を踏まえた学問的意義等、事業の独創性、新規性、継続性（競争的資金等との関連性を含む）、2) 中期目標及び中期計画との関連性、3) 事業の取組内容として、全体計画のほか年度別取り組み内容、プロジェクト終了後の事業展開 4) 事業の実現に向けた学内外の協力体制等、全体的な事業推進体制、大学間連携や連携融合事業等、国際連携事業については、機関名、自助努力、学内資源（人的・物的）の活用等、工夫改善の状況、5) 事業達成による学問的波及効果、成果の具体的活用方法や成果による社会的波及効果、大学の教育研究活動にもたらす改善効果などを説明する必要がある、学内での十分検討して熟成し、かつ実績のあるプランでなければ要求書の作成は難しい。

これらの事業全体の概要を 1 枚のポンチ絵にして分かりやすく説明することが私の最初の仕事となった。次に、個別事項ごとの内容を詳しく説明するため、ポンチ絵を 15 枚ほどにまとめ、パワーポイントに作り上げ、最終的には、概算要求書の様式に文章化することが必要となる。添付す

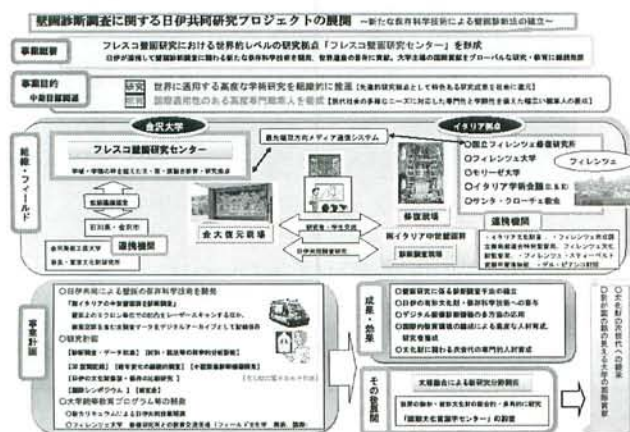
る参考資料に関しては、過去に報道された新聞記事は数多くあり、記事の中からどれを選択するか迷う程であった。

3. 高い目的・目標を掲げたプロジェクト

本プロジェクトの目的・目標は、金沢大学の国際貢献プロジェクトとして5カ年計画（2004-09年）で実施されたイタリアのフィレンツェ三大教会の一つであるサンタ・クロチェ教会大礼拝堂における14世紀の壁画修復・調査研究の日伊共同実績のもとに、壁画分析調査用の小型機器を開発し、壁画研究に関する新たな診断手法を確立して、世界の壁画修復・保存に貢献することで我が国の「顔の見える大学主導」の国際貢献を目指すとしている。

事業は、ルネサンス美術の展開を大きく推進したフレスコ画法形成の源流であるとされながらも、これまで様々な問題から修復計画の対象から外されがちであった南イタリアの中世壁画群を日伊共同で調査・診断し、各種映像記録をデジタルアーカイブとして系統的に記録保存することで世界的文化財の保存に貢献することを目的としている。

また、日伊文化財の比較研究を進め、データサイエンスに基づく文理融合型の大学院等教育プログラム開発、及び学域再編の実績を生かした学際的・融合的な新領域を創成して、教育・研究の活性化を図ること。大学内に先進的研究・教育拠点を形成し、密接な日伊の連携協力のもとで、新たな知識・技術の向上を目指すとともに、豊かな伝統文化に恵まれた金沢の地であって、文化財保存に関わる高度な専門職業人を養成して地域の活性化に寄与することなどを目標としている。



VI. 南イタリア中世壁画群調査プロジェクト始動

1. プロジェクトの緊急度と必要性の検証

南イタリアの中世壁画群は、フレスコ壁画法のルーツでありながら定期的な地震の危機にも曝され、消滅寸前となっている。先進的な日本のデジタル技術を導入して緊急に診断調査し、デジタルアーカイブとして記録保存する必要がある。

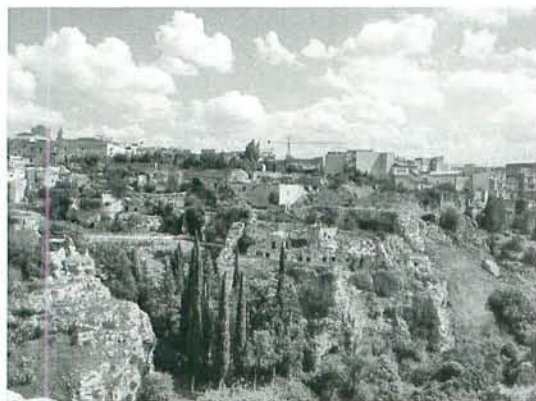
様々な歴史的背景からイタリアの文化財修復・保存事業は世界遺産や著名観光地など特定の地方に偏りがちで、歴史的には高い価値を有しているにもかかわらず、今日まで南イタリアの中世壁画群は劣悪な環境の中に放置されている。中世壁画の修復・研究プロジェクトを統括した世界唯一の実績がある本学はイタリア側からも継続的な協力要請がなされていた。

2. イタリア側との契約で交渉決裂か

2010年9月私がフィレンツェ到着の翌日に大きな問題が起こった。初年度の契約について交渉するため私と宮下教授等の3名は、国立フィレンツェ修復研究所（以下「OPD」という。）を訪れた時である。2011年度の調査計画の話し合いを進めていく中で、契約金額の交渉の段階になり暗礁に乗り上げてしまった。イタリア側と日本側の大きな認識の違いがあったのだ。本学は、5年間のサンタ・クロチェ教会壁画修復プロジェクトで築き上げた信頼関係の中で、南イタリアプロジェクトを両者協力して進めていくつもりで、調査に係る必要経費のみを委託調査費として支払う提案をした。しかし、イタリア側は全く応じなかった。振り返って考えると2010年5月の日本での国際シンポジウム開催に併せ、OPD所長等を金沢大学に招き、南イタリアプロジェクトの合意書の調印を行った。その際、基本的な協力について約束はしたものの、具体的な契約は後日に交わすことにして金額を明示しなかったことが原因の一つであった。当時のOPD所長は、日本からの帰国のその足で、イタリア文化財活動省を訪れ、日本の大学と連携して、南イタリア各州の洞窟壁画を調査し、デジタルアーカイブとして保存する大きなプロジェクトの予算をOPDの力で獲得したように報告してしまった。調査内容は、本学が計画しているよりはるかに多い調査箇所と調査診断項目を考えていたようで、本学が提示した予算では多くの調査は不可能であることが判明した。結果、日伊双方の立場を主張するあまり交渉は決裂してしまったのである。これまで私は、イタリア人は陽気で親日的で友情に厚く、親しくなると家族のように付き合ってくれると思っていたのだが、プライドが高く、契約や特にお金に関することになると友情よりビジネスに徹し、あまりにも自分勝手な都合を主張する強情な面を見せつけられたのだ。

確かに、イタリアは日本に比べれば壁画の修復保存に関しては、歴史と経験があり多くの実績を持っている。まして「日本の大学がイタリアの歴史遺産に単独で調査したいと言っても、出来ることでなく、イタリア文化財活動省の許可や現地の文化財担当部署の協力なしでは出来ないでしょう。」と言われればその通りである。それから、数日間の戦いが始まった。宮下教授と深夜まで作戦を練り、数

回にわたって交渉した結果、本学の調査は毎年9月に集中して実施し、イタリア側は、年間を通して本学が実施できない箇所も追加して調査することとし、双方のデータを取りまとめ、デジタルアーカイブにすることでようやく決着した。



グラヴィーナ・イン・プーリアの峡谷

3. 調査対象壁画選定のための予備調査実施

イタリア半島は日本と同様に南北に長く、北海道と沖縄ほど気候が異なっている。南イタリアは、青空に白い壁の建物が映え、竜舌蘭（リュウゼツラン）が背の高い花茎を伸ばし、大きなサボテンが花と実を付ける南国ムードのあふれる地域である。南イタリア中世壁画群調査に当たっては、まず予備調査として南イタリア各地の洞窟壁画の現状を視察することから始まった。

本プロジェクトで調査する対象壁画を選定するため、2010年8月から9月にかけて2回の予備調査を実施した。1回目は、宮下教授とOPD壁画部長、修復士、モリーゼ大学の研究者、南イタリアのプーリア州の市文化財担当者等との合同調査、2回目の調査からは私も参加し、OPD所長、プーリア州文化財監督局長ファブリーツィオ・ボーナ氏等が同行し、プーリア州各地から希望のあった約20か所の対象壁画を調査した。その予備調査の結果を基に、OPDと協議した結果、2011年9月にイタリア側研究チームと本学が共同して本格的調査を開始する洞窟教会を決定した。



プーリア州文化財担当当局関係者と

4. 予備調査を終えて2011年第1回調査地決定

今回、南イタリアの中世壁画群の実態を調査した結果、宮下教授が20年前に調査したとき以上に洞窟教会の壁画は剥落し、消滅寸前となっていた。その中でも唯一、プーリア州グラヴィーナ・イン・プーリア「サン・ヴァート・ヴェッキオ教会」の壁画は凝灰岩台地をトンネル状に掘削した教会で、堂内には13世紀から14世紀初めにかけて描かれた壁画がよく保存されていた。これは1958年にローマ中央修復研究所によってマッセッロ法（ブロック移動）でボマルチ博物館内に移築されたからで、現在も色彩も鮮やかに残っている。壁画を剥がす手法は現在イタリアではあまり行われていないが、環境や状況を判断してこのような保存手法も研究課題となりうると判断し、第1回目の調査を同壁画に決定した。また、同地域は、市長自ら、地域を上げて本学の調査を歓迎しており、現地の大きな協力と支援が得られることが同壁画を選定したもう1つの理由である。

また、もう1か所のボッジャルド（ヴァステ）「サンティッシミ・ステファニ礼拝堂」は、10世紀から14世紀にかけて描かれた壁画のある礼拝堂で、17世紀まで使用されていたが、その後は荒廃し、農地の中に取り残されたものである。



グラヴィーナ・イン・プーリア市長室で

5. 南イタリアの現地調査は危険がいっぱい

2011年9月から始まる本格的な研究調査には本学調査団10数名が現地の調査に入る予定になっている。その際、想定外のような問題が発生する可能性がある。そこであらかじめ現状を調査し、あらゆることをシュミレーションして事前に準備する必要があるため2011年1月宮下センター長の調査に私も同行することになった。

特に、私の役割は、イタリアの中でも悪いとされる治安、交通の便、天候、通信環境のほか、交通手段、バス、タクシー、レンタカー、公用車、宿泊、食事、トイレ、水、電源の状況、現地調査のための物品、会場借り上げ、調査機器保管場所、現地ガイド、通訳、運転手、人夫、技術者、警備員等の各種人件費のほか、支払内容が想定できないものが発生する

可能性があり、それらの情報を収集することであった。

2011 年 1 月は、バジリカータ州の世界遺産マテーラを調査した。マテーラのサッシ地区は世界遺産ということもあり、洞窟教会の管理が厳しく、現地ガイドに事前に予約し、洞窟教会の管理人が鍵を持って現れない限り、中にも入れないよう厳しく管理されていた。本センターの調査地として選定するには、様々な課題が残っており、今後の検討が必要である。

2012 年以降の調査地は、バジリカータ、カラブリア、カンパーニア各州の壁画を予備調査し、選定する計画になっている。

6. 音楽が結ぶイタリア人との国際交流



交流会でカンツォーネを歌う筆者 2009 年 6 月

日伊共同事業として展開する本プロジェクト推進に当たっては、自治体（石川県、金沢市等）、大学コンソーシアムいしかわ、民間企業等の連携のほか、イタリア側はフィレンツェ大学、モリーゼ大学、イタリア学術会議(C. N. R)、サンタ・クローチェ教会、OPD、フィレンツェ文化財監督局、フィレンツェ市立国立美術館連合特別監督局等と連携・協力して推進する必要がある。私は、地域連携、国際交流等の経験はあるが、イタリア語はおろか英語もあまり得意ではない。音楽活動では国際交流として、ロシア、ハンガリー、スイス、フランス、ドイツ、韓国等の演奏家や団体と共演する交流を続けてきたのであるが、会話ができたらもっと心を通わせて親しくなれるのにと、いつもその場限りで悔やんでいた。国際共同研究を進める上でいちばん大切なことは、継続的な信頼関係を築くことが重要である。イタリアをフィールドにした仕事をする上で必要なのはイタリア語だと自覚はしている。あいさつ程度しか出来ない私は世界共通の言葉である音楽で自分を知ってもらおうと、2008 年 9 月と 2009 年 6 月にフィレンツェに訪問した際、イタリア民謡を歌って自己アピールし、心の交流を図り、人間関係を築くことが出来た。いまでは、イタリアの人たちから「歌手の Kamiguchi」と言われるほど親交が深まっている。これからも積極的に国際親善交流も果た

していきたいと思っている。

VII. 本年度のまとめと成果

この 1 年間を振り返ってみると、当初の予定以上の計画を駆け足でこなし、成果を上げてきた。その中から主なものを紹介したい。

1. 文理融合型研究拠点「フレスコ壁画研究センター」を設立し、学内の文系、理系、医系の教員による研究体制を整備し、OPD と合意書を締結した。イタリア研究者との国際共同研究チームによる役割分担が決定した。

2. 東京と金沢で開かれたシンポジウムの開催を機に、イタリア大使館及びイタリア文化会館と本プロジェクトの円滑な実施のための連携協力関係を構築することができた。



教会天井部にてマリアローザ修復士とセンターの文・理工・医系教員



イタリア修復関係者とイタリア駐日大使館にて

3. 「日伊教育研究連携事業」として、国立フィレンツェ修復研究所のマリアローザ・ランフランキ専任修復士を本学に招へいし、人間社会学域、理工学域、医薬保健学域の学生等を対象に、集中講義及び学生実習指導を行なった。ストラッポ法（最上層の描画面のみを薄く引き剥がす技法）とスタッコ法（下塗り漆喰と上塗り漆喰の層間で剥がす技法）で壁面から剥がして壁画をどこまで忠実に保存できるかを比較した。

4. 金沢大学フレスコ壁画研究センター・文化庁連携事業「日伊文化財協力事業ワークショップ」をフィレンツェで開催した。この事業は、日伊の壁画の保存手法等に関する比較研究を行うことにより文化遺産の保存修復に貢献すること、また、日本の文化庁とイタリア文化財・文化活動省が文化財保護に関する政府間交流を通して、行政官及び研究者、技術者が壁画の保存修復と活用の調和に関する専門的な意見交換を行うこと等を目的として開催された。文化庁担当者は、「金沢大学の南イタリア中世壁画群調査プロジェクトは、日本の古代壁画の保存の在り方を考える上で参考となる例であり、今後、さらに日伊の研究者の交流を深めたい」と述べられた。今後、本センターと文化庁が連携して研究調査を進め、日本の壁画の保存科学の進展に寄与することがその成果として期待されている。



「日伊ワークショップ」OPDで



文化庁視察団とサンタ・クロチェ教会前で

5. 本事業は世界的な注目を受け、日伊両国の多くのマスコミから報道、新聞、テレビ、インターネット等で世界に向けて情報が発信されている。特に、テレビ金沢から年6回放送された現地取材した番組は、多くの県民の好評を得ている。

6. 本学フレスコ壁画研究センターのホームページで「サンタ・クロチェ教会壁画修復プロジェクト」のデジタル・アーカイブの掲載、「ニューズレター」発行等、研究成果

を積極的に発信している。

7. 日本におけるイタリア美術史の普及・促進のための熱意あふれる貴重な宮下教授の活動及びフィレンツェのサンタ・クロチェ教会の壁画修復を統括したことに對し、イタリア大統領から「イタリア連帯の星」勲章 (OSSI) カヴァリエーレ (騎士) 勲章を受章されたことは関係者としても喜ばしく特筆する出来事である。

最後に、センター職員が一丸となつて残る3年間で事業を計画どおり進捗させ、本プロジェクトが大きな成果をあげ、壁画の保存科学の進展に寄与できるよう、センターを支える裏方としてベストを尽くし、コーディネーターとしての使命を果たしていきたいと思う。



イタリア駐日大使館で大統領からの勲章を受章